



京大広報

No. 629

2007.12



ジェーン・グドール博士（左）に名誉博士の称号を贈呈
—関連記事 本文2506ページ—

目次

京都大学における環境安全衛生 大寫幸一郎……………2504	宇治キャンパス公開2007を開催……………2510 「平成19年度第1回事務改善G P」表彰式を開催 ……………2511 「アトムサイエンスフェア2007」を開催……………2512 国際交流会館おうばく分館で消防訓練と交通安全 講話を実施……………2512 ジェーン・グドール講演会を開催……………2513
〈大学の動き〉 「船井哲良記念講堂・船井交流センター」 竣工記念式典を挙行……………2506 ジェーン・グドール博士に名誉博士の称号を贈呈 ……………2506	〈訃報〉……………2513 〈日誌〉……………2515 〈お知らせ〉 再生医科学研究所平成19年度学術講演会……………2515 第11回リカレント教育講座『「心の教育」を考える —発達障害と家族への支援—」……………2516
〈寸言〉 大学と人生 木下博夫……………2507	〈隔地施設紹介〉 フィールド科学教育研究センター和歌山研究林 ……………2517
〈随想〉 入試雑感 名誉教授 天野正輝……………2508	
〈洛書〉 育てること,教えること,学ぶこと 西川元也……………2509	
〈話題〉 平成19年度京都大学森林科学公開講座「森を食べる —森と木と健康—」を開催……………2510	

京都大学における環境安全衛生

環境安全保健機構長 大寫 幸一郎

平成16年の大学の法人化に1年遅れて、平成17年4月に環境安全保健機構が国際イノベーション機構、国際交流推進機構、情報環境機構、図書館機構とともに発足しました。その発足式を7月に時計台記念館で開催しま



した。本学より尾池和夫総長、田中成明法務安全担当理事(当時)と私、また学外から高月 紘名誉教授、高橋政和京都市環境局地球環境対策部長、桂 一郎(株)ワコール執行役員社長室長に講演者・パネラーとして出席いただき、京都大学環境憲章の再確認と本学の環境への取り組みのキックオフとして、教職員学生等約180人の参加を得て行いました。機構の業務は 1. 環境安全保健業務の推進及び連絡調整に関すること 2. 事業場又は部局における環境安全保健業務の支援に関すること 3. 環境安全保健に関する教育訓練、講習その他啓発活動に関すること 4. その他環境安全保健に関し、機構長が必要と認めること の4つです。

法人化にともなって大学は人事院規則から労働安全衛生法(安衛法)の管理下におかれることになりました。教育と研究が使命である大学の研究室の作業現場に安衛法の基準や定義がそのまま適用されることには戸惑いがあります。大学の研究はテーマが頻繁に変わり、作業内容も作業条件も変わり資材や化学薬品の使用量も頻度も一定ではありません。多くの実験は多種、少量で低頻度です。したがって、安衛法できめられたことをそのまま受け入れて対応できる事柄もありますが、そのまま受け入れるには問題が多い事柄もあります。とはいえ法律は守らなければなりません。そこでこれらにどう対応するのかが当面の課題となりました。大学特有の対応が必要でそのためには自主管理しようということになりますが、単に自主管理するというだけでは法の趣

旨にかなった基準が確保できるかどうか心配です。また、大学は人材育成機関であり、より高度な考え方で安全教育を実施すべきで、ただ法的な基準をクリアすればそれでよいというものでもありません。何らかの管理システムの導入が必須となります。いろいろ知恵を出しながら、最終的には京都大学にふさわしい環境安全マネジメントシステムを構築することが目標となります。まだまだ道遠しという感じですが、具体的な事例をあげてこれまでの取組みを紹介し、つづいて今後の課題をあげたいと思います。

平成17年7月末からアスベスト問題が重要課題となりました。アスベスト問題専門部会を機構の環境安全衛生小委員会のもとに設置し、問題の対応について議論を進めました。京都大学が所有する建物すべてについて、吹き付けアスベストが使用されている場所を調査したところ体育館をはじめ60ヶ所で使用されていることが明らかとなりました。ひとつひとつの物件についてアスベストの種類、アスベストの含有量ならびにその空気中のアスベスト濃度測定など詳細な状況調査を行い、それぞれについて対応策を講じました。体育館については9月26日に使用禁止とし天井部のアスベスト撤去作業を実施しました。撤去後体育館内のアスベスト濃度が館外と同じであることを確認した上で3月中旬には使用を再開しました。その結果卒業式は体育館で無事執り行うことができました。この他の建物についても迅速かつ適切な対応をとりました。体育館以外の建物に使用されていた吹き付けアスベストの撤去工事も平成18年度内に完了しました。しかしながら各研究室で使用されている機器の中にもアスベストが用いられているものが多数あります。これらの解体、除去、



環境報告書発行記念シンポジウムで発行の経緯を述べる大寫機構長

大学の動き

「船井哲良記念講堂・船井交流センター」竣工記念式典を挙

10月20日(土)桂キャンパスで「船井哲良記念講堂、船井交流センター」の竣工記念式典が行われた。

同施設は、科学技術・地域・自然の融合・交流を図るため、船井哲良氏(船井電機株式会社代表執行役社長)より寄贈されたもので、船井哲良記念講堂は、建物の中央に竹細工をイメージした楕円形のスペースをとり、本学で最大規模の500席の講堂を中心に、各種イベントや展示会に利用できる国際連携ホールや会議室を備えている。船井交流センターには、京都市内を一望できる桂サロンや、児童に身近に科学を感じてもらえる場としてのジュニアラボ、民間企業との共同研究室、福利厚生施設としてアスレチックルームやトレーニングルームなどが設けられている。

式典には、建物の寄贈者である船井哲良氏をはじめ久保公人文部科学省大臣官房審議官、猿渡知之京都府副知事、葛西宗久京都市総合企画局長、長尾 真

前総長を迎えて、尾池和夫総長、木谷雅人、北 徹両理事・副学長、西本清一、松重和美両副学長など470人が出席した。



船井哲良氏(左)へ感謝状を贈呈する尾池総長

式典では、京都の伝統的儀式である祇園手打ち式および舞踊が行われた後、尾池和夫総長、船井哲良氏による挨拶に続き、久保大臣官房審議官、猿渡知之京都府副知事、葛西宗久京都市総合企画局長から祝辞が述べられ、尾池総長より船井哲良氏へ感謝状の贈呈が行われた。

(企画部)

ジェーン・グドール博士に名誉博士の称号を贈呈

11月12日(月)時計台記念館の迎賓室において、英国の霊長類学者で、野生チンパンジー研究の第一人者であるジェーン・グドール博士に対し、尾池和夫総長から名誉博士記およびカラーコードが贈呈された。また、松沢哲郎霊長類研究所長が英語で「趣意書」を朗読した。

名誉博士は、今回で11人目で、ノーベル賞受賞者の利根川進博士に平成16年4月に贈呈して以来であり、初めての女性の名誉博士となった。

グドール博士は、人間以外の動物が道具を作り、使うことを世界ではじめて発見し、チンパンジーの寿命が50年にもおよび、親から子どもへと世代を超えて引き継がれる知識や技術や価値があることを示されたことなどの研究により、学術文化に寄与した功績が特に顕著であり、しかも、今西錦司博士や伊谷純一郎博士をはじめ、本学の霊長類研究者とも関係が深く、本学の教育研究にも大きな功績を残したことにより、名誉博士の称号を贈呈されたも

のである。

名誉博士記の贈呈後、時計台記念館の国際交流ホールにおいて、記念講演会が行われ、参加者は、グ



グドール博士(左)と尾池総長

ドール博士の講演に熱心に耳を傾けた。また、引き続き行われた記念祝賀会でグドール博士は、参加者に笑顔で応じられていた。

なお、グドール博士は、京都賞や、英国王立人類学会ハックスリー賞をはじめ、数々の賞を受賞されているが、わが国では、初めての名誉博士の授与となる。また、野生生物保全活動が高く評価されて、国連平和大使を務められている。

(教育推進部)

寸言

大学と人生

木下 博夫



人生における大きな選択を上げれば、大学、就職、結婚である。その中でも大学は人生の転機として最初に訪れる。選択した京都大学の学生や卒業生に対する内外の評価は、個人差はあるものの総じて各人が個性を持ちあわせていることが魅力的であり、同じ大学出身であるという枠をあまり意識せず、群を作らないと言われている。思い返すとこの京都大学の特色は当時の入試の出題傾向に現われていた。ただ自分の大学生時代は、両親から離れた平凡な下宿生活であった。それでも思い出はたくさんある。

下宿人を四年間家族同然に扱ってくれた下宿先の好意をはじめ、作法の会得より座禅に夢中だった「心茶会」での修業、たった一冊の経済原論の文庫本をテキストに輪読を指導してくれた恩師、寺全体を独り占めしたいと欲張って閉門前に訪問した学生を暖かく迎えてくれた古寺。いずれの出来事から考えても、今でも京都で大学生活を過ごし、京都大学で学べたことはすばらしい経験であった。この世代になって改めて日本に生まれた事を誇るとともに、京都で学生生活を送れた人生に感謝し、自信を持っている。

中央省庁に就職したため、卒業後は大学を訪れる機会は少なかったが、今から二十年ばかり前に京都市役所への出向を命ぜられて、京都大学とのつきあいが再び濃くなった。当時地方公共団体サイドでは大学の存在は文部省のテーマと考えており、地方行政と大学との関係を強化しようとする認識が薄かった。そこで大学が地域経済面で果たす貢献や、セミナー等大学が提供してくれる知の発信を例にして、大学の存在意義が地元の地域社会にとっては極めて広範であることを理解してもらうように努めた。具体的には大学と市役所のトップによる定期的かつ積極的な交流の場を作ることから始めた。このことが今日の京都における大学コンソーシアムの基礎づく

りにつながっていったと自負している。

また、知的交流の場の形成は京都の都市づくりに最重要課題と着目し、大学を中心とした研究拠点整備にも努めた。苦労もあったが、京都大学関係者との連携もあってスタンフォード日本センターの誘致に成功し、その他国際日本文化研究センターの立ち上げ、都心におけるリサーチパークの整備、更には京都大学の桂キャンパスづくりにも関わらせてもらった。自分が担当した都市計画分野の面で大学への想いが発揮できたのではないかと満足している。それに加え、経済学部七十周年の公開講座の講師の一人として、また最近では時計台講演会の未来フォーラムにも「都市の未来」をテーマとした講演の機会を与えてもらい、ようやく大学に多少なりとも恩返しのできたのではないかと思っている。

最近の特色として東京に生まれ、東京に育ち、東京に就職する人口が急増している状況から、国土政策のあり方について見直しが求められている。学都京都に対しては昭和30年代以降、人口、産業の集中防止策として国策上教育研究の新規立地を抑制した時期が続いた。現在はこの制度も見直され、学都京都が個性を活かす仕組みに戻ってきており、ぜひ人間性の豊かな人材づくりに貢献するようにつなげてほしい。

京都大学をはじめ国立大学は、法人化の改革の中で現在種々ご努力されている。私の会社も道路公団等民営化の流れの中で、二年前に株式会社化がされた。道路事業の本質に関する議論が十分されないままでのスタートではあったが、経営の形態を変える経過の中で、一人一人の社員の改革に向けての姿勢が徐々にではあるが発揮され始めている現状である。本来改革は外から言われてするものではないので、大学の場合も自ら積極的に行動し他業種との交流、接触を増し、刺激を取り入れていくことがよいのではないかと。法人化することが、教育研究にとって一つの転機を与えてくれたと考え、大学の内容を充実されることを期待している。

(きのした ひろお 阪神高速道路株式会社代表取締役社長 昭和42年農学部卒業)

随想

入試雑感

名誉教授 天野 正輝

師走の声を聞いて、今年も入試のシーズンを迎えた。受験生側、大学側双方にとって未来の在りようにかかわる一大イベントであるから、期待と緊張は高まる。かつて、筆者が、5教科8科目を3日間(3月3日、4日、5日…5日は午前中)で受験した頃を懐かしく思い出す。



大学入試制度・方法の改革は、初等・中等教育の改革の成否の鍵を握っている。にもかかわらず、わが国の入試研究は断片的、一時的なものに終始して、その積み上げ(研究の科学化)が無いと言われる。京都大学の場合も、多くの教員が交代で入試業務(出題、採点、実施、監督)に携わることは、入試の重要さと責任の重さ、困難さを広く共通認識するという利点はある。しかし、各学部から選出される入試担当教員の任期は短く(1年で交替。出題担当は数年連続が多い)研究の継続性が無い。その上、自らの研究、教育活動にとって、雑用、やっかいな仕事としてしか位置づいていない。事務部門からの支援も大きい、2、3年で配置換えになってしまって、ここでも継続性は望めない。また、研究成果が大学間で共有されぬまま、その場限りで終わってしまう傾向も強い(研究の孤立化)。入試選抜方法の多様化、評価尺度の多元化が進むなかで、入試日程の長期化・過密化、業務の煩雑化・複雑化は、教職員の負担と責任を一層大きくする。チェック体制の強化にもかかわらず、入試ミス(出題ミス、実施ミス、合否判定ミス等)は毎年のように繰り返され、全国的にみて年々増加する傾向にある。入試問題は初出に限られているから、過去問題との照合に多大の時間とエネルギーを費やした経験の有る者にとって、過去問解禁の最近の動きは注目される。

大学入試に関するさまざまな調査、研究、企画を継続的に行う機関の設置の必要性を、筆者は、関係する委員会や当時の総長にも提言したが、実現を見るに至っていない。もっとも、現在では、大学入試

センターの研究開発部の研究成果を全国の大学は共有できるのだが、それにも限界がある。京都大学のような大規模大学の場合、専門研究員を擁した大学独自のアドミッション・オフィスは欲しいものだ。

大学生の学力低下傾向が社会問題になって久しいが、この傾向は年々進行しているように思われる。厳密なデータに依らなくとも、多くの大学教員(国公立を問わず)から異口同音、実感をもって語られる。この要因は複合的なものであるが、大学入試における試験科目の削減や、学力試験を伴わない推薦入試の拡大といった、入学者選抜にかかわる近年の変化(方法の多様化、評価尺度の多元化)を、有力な要因と見るのは、筆者だけではない。

選抜方法の多様化傾向に拍車をかけているのが、18才人口の急激な減少である。18才人口は、いまや120万人台に減少し、750を超える大学と430の短大による、学生確保の競争は熾烈を極めていっている。「大学全入時代」元年といわれた2007年入試は、予想に反して私立大学の総志願者数では増加となった。そこには、サバイバル戦略としての選抜の多様化(何でもありの受験生層の開拓、確保)があった。それだけに、日本の大学教育の質的水準の低下をどう防ぐかが、今後ますます重要課題となる。

「共通一次世代」という言葉は、いまや、遙か昔のことのように忘れ去られてしまっているが、大学生の学力低下や学習意欲衰弱の問題を考察するなかで、筆者には看過できない言葉である。マークシート方式による共通一次試験が導入されて間もなく、基本的学力の低下、問いと答えの間を短略化した思考様式を身につけ、結論(1つの正解)だけを知りたがり、そのプロセスを理解しようとしないう学生、独創性、積極性の芽は摘み取られ、リーダーシップを発揮できない学生……等々の声が各地の大学教員の間から起こっていたことが思い出される。

入試制度・方法改変の激動期に在職した筆者にとって、「入試に王道なし」との言葉は実感だが、「てま、ひまかけて、じっくり」受験生を選ぶことが王道のように思える。

(あまの まさてる 元教育学研究科教授 平成14年退官、専門は教育方法学)

洛書

育てること、教えること、学ぶこと

西川 元也

2歳の息子が驚くばかりの速さでものごとを吸収するさまを見ていて、人が成長することのすばらしさを実感している。帰宅すると、童謡が歌えるようになっていたり、ジャンプができるようになっていたり、なぜか6を抜かすことが多いものの1から10まで数えられるようになっていたり。私がコーヒー豆を挽いていると「うまい!とうたん、コーヒー」と声を掛けてくるし、挽いた豆の香りに「いいにおい」と満面の笑みを浮かべる。飲んだことのないコーヒーを「うまい」というのは、私がコーヒーを飲むでは「うまい」と言うのを聞いて覚えたからに違いない。「うまい」なら構わないが、私が何気なく使った言葉もすぐに真似されてしまい、ニコニコしながら「なんでや」と言い返されたりする。両手が塞がっていついつい足でドアを閉めたりすると、ぎりぎりまで手でドアを閉めておいて、最後はわざわざ足でボタンとする息子の姿を目撃することになる。

初めて子供を授かり、周囲の方々の暖かいご支援のもと妻とともに息子の成長を喜んできた。生まれてしばらくの間は、授乳や沐浴、排泄の世話などに追われていたが、彼が育つのを手助けしてただけで何かを教えるということにはなかった。逆に、初めて経験する子育ての中で教えられることばかりだった。一日一日が過ぎていく中で、首がすわり、寝返りができるようになり、「はいはい」をし、立ちあがり、そして歩くようになった。しかし、寝返り方を教えたこともなければ、ほふく前進を見せたり、歩き方を指導したりすることもなかった。

言葉も徐々に出るようになり、近頃は私たちの言うことはほぼ理解しているようだ。それだけでなく、都合が悪いことは聞き流しているようにさえ思える。自我が芽生え、日に日に自己主張が強くなってきた。帰宅して妻と話し始めると、「おはなし、あ



と!」と宣言し、おもちゃを持ってきて一緒に遊ぶようにねだる。ブロックで車を作ってとうるさく言っておきながら、完成を待たずに勝手に派手なオプションを装着し、ふと気づいて見本と違うと文句を言う。「はっば、きゅうけい」の一言で、ほうれん草やネギなどの葉菜を口にしないことも多い。そうかと思うとトマトやかぼちゃをすごい勢いで食べ、「もっと」とおかわりを要求する。自分の短い箸では不満で、どんなに使いにくくても私の長い「かっこいい」箸を使いたがる。ご飯の支度や掃除、さらには車の運転までも、興味を持ったことはどんなことでも自分でしないと気が済まない。この積極性を歯磨きに発揮してくれたら、という親心は全く汲み取ってはくれないが。

いろいろなことに興味を持つようになると、手助けだけでなく、してはいけないことを教える必要が出てきた。熱いからポットには触らないこと、車が来るから右左をよく見て道を渡ること、こぼさないようにコップは両手で持つこと。教育の甲斐あって、私たちが片手でコップを持っていると厳しくダメ出しをしてくれるようにまでなった。

息子と接していると、日常生活には気をつけなければならないことが多いと改めて感じさせられる。彼が成長するにつれて行動範囲も広がり、教えなければならないこともどんどん増えるだろう。しかし、「なんでや」と言ったり、足でドアを閉めたりするように、私たちの言動を真似る(学ぶ)ことで、教えたことよりもはるかに多くのことを吸収しているようだ。これまでの私の人生を振り返ってみても、周りの人達の言動から多くのことを学び、ときには反面教師とすることもあった。そうであれば、何を教えるかも重要だが、どういった言動をとるかが大切である。息子の成長をきっかけとして改めて実感することができたこの思いを忘れずに、家族や学生、その他多くの人達とのふれあいの中で成長していければと思う。

(にしかわ まきや 薬学研究科准教授、専門は生物薬剤学)

話題

平成19年度京都大学森林科学公開講座 「森を食べる—森と木と健康—」を開催

生存圏研究所と農学研究科森林科学専攻の共催により「平成19年度京都大学森林科学公開講座」を10月13日(土)・14日(日)に開催した。この公開講座は、人間社会にとって森林と樹木が如何に重要であるかを深く理解してもらうことを目的として、毎年開催しているもので、宇治キャンパス内の木質ホールに集まった40人の参加者は、川井秀一生存圏研究所長の挨拶を皮切りに、5人の講師による講演を熱心に聴講した。

今年度は森を食べると題して、微生物から人間、さらには地球がエネルギー源としている「森林」について森と生き物の仕組みや、森の機能、森から生まれるエネルギーや新しいマテリアルについて考えてみるというものであった。環境破壊が進む中で改めて「森」の存在について参加者も認識を新たにした。

14日には研究・教育の現場を実際に体験するため、



熱心に講演に聞き入る参加者(木質ホール)

3ヶ所のテーマ別サイトに分かれて見学実習を行い、その後、きのこや木の実などの森の幸を食し、舌鼓を打って散会した。

(生存圏研究所)

宇治キャンパス公開2007を開催

今年で11回目となる「京都大学宇治キャンパス公開2007」が、10月20日(土)、21日(日)に開催され、晴天にも恵まれて2日間で約900人以上の参加者があった。

21日には、宇治キャンパス会場以外に、宇治川オープンラボラトリー会場(伏見区横大路下三栖)でもキャンパス公開が開催され、宇治キャンパス会場から宇治川オープンラボラトリー会場へ5往復のシャトルバスを用意、宇治川オープンラボラトリー会場は約200人の参加者があった。

今年のキャンパス公開の統一テーマは「宇治キャンパス60年こしかた これから」で、今年は宇治キャンパスが開かれてから60年目の節目の年にあたり、そこで、宇治キャンパスがこれまでに経験してきた60年間をふりかえるとともに、宇治キャンパスに結集する研究組織が今後どのような研究を推進し



ようこそ 宇治キャンパス公開に!!

ていこうとしているかを紹介した。

20日午前で開催された公開講演会は、「宇治キャンパスのこしかた・ゆくすえ」(松本 紘理事・副学長)、「にぎわいの宇治キャンパスを目指して」(河田恵昭防災研究所教授)、「最近の宇治キャンパスにおける

若手人材育成プログラム」(時任宣博次世代開拓ユニット長)と題して行われた。

2日間を通して、総合展示では、各研究所・研究科・センターの紹介が行われ、特別展示では、宇治キャンパスの歴史を年表と当時の写真で紹介した。公開ラボでは、各研究所の大型実験施設や実験室を公開、参加者自身が体験できる実験を通じて、楽しみながら先端科学の研究にふれ、「難しい話もあったが、科学にふれることができ楽しかった」「子供たちが理科を好きになると思うので、続けてください」との感想が寄せられた。



宇治キャンパス60年をふりかえる(特別展示)

(宇治地区事務部)

「平成19年度第1回事務改善G P」表彰式を開催

「平成19年度第1回事務改善G P」の表彰式が、10月23日(火)総務担当理事室で行われた。

事務改善G Pは、職員が自らの部署における組織的な業務改善について、提案・実践し、それらを評価すると共に、その改善効果に係る実績を「グッド・プラクティス」として全学に改善事例として提示することにより、更なる事務改善と意識改革を促進するものである。

今回の事務改善G Pは、本年4月に募集を行ったところ7件の応募があり、その内容について、募集要項に基づき、全学的な影響力や実務的な観点から、提案の進捗状況を踏まえて厳正に審査を行った結果、下記のとおり、最優秀1件、優秀2件が選考された。

表彰式では、木谷雅人総務担当理事・副学長より受賞者へ、それぞれ表彰状の授与と、副賞が贈られた。

【最優秀(1件)】

「有機廃液外部委託業務全般の電子化による簡略化」

工学研究科附属環境安全衛生センター

【入選(2件)】

「新採用教員等への事務手続き等の作成」

情報環境部情報企画課総務・企画グループ

「パソコンの各種設定方法や実際に職場で起こったトラブルへの対応のFAQ化」

情報環境部情報企画課業務システムグループ

受賞となった提案概要などに関する詳細は、本学ウェブサイトの学内専用掲示板をご参照ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_notice/close/common/kaikaku/concours.htm



左から情報環境部 西垣昌代さん、工学研究科 板橋佳代さん、木谷理事・副学長、情報環境部 田中孝二さん

(総務部)

「アトムサイエンスフェア2007」を開催

原子炉実験所では、10月28日(日)、「アトムサイエンスフェア2007」を開催した。このイベントは、小学生から一般の方まで、地域住民の方々に広く科学に興味を持ってもらうため、地元自治体(熊取町、泉佐野市、貝塚市)の教育委員会等の協力を得て、2002年度から毎年実施しているもので、今回が第6回目である。

今回は、昨年度と同様、3つの実験コーナーと体験コーナー、そして展示コーナーを作り、参加者は班ごとに分かれ、すべてのコーナーを順番に体験してもらうしくみとしたところ、定員を大きく上回る89名の子供達(父兄を合わせると172名)の参加があり、満員の会場でそれぞれのコーナーを楽しんだ。

磁性スライムの実験では、磁石を近づけた時のスライムの奇妙な動きに面白がったり、驚きの声を上げたりと、楽しんでいた。また、紙コップによる分光実験ではコップの中にできる虹の美しさに見とれ、定番の霧箱実験では、暗くした部屋の中で懐中電灯の光に照らし出される放射線の飛跡を熱心に観察し、いずれの実験でも子供達が真剣に取り組む姿



霧箱実験の説明に聞き入る子供たち

が見られた。体験コーナーや展示コーナーでも、自分でやってみたり、熱心に質問したり、また、今回のアトムサイエンスフェアのマスコットの「うさッチ」の人形と一緒に記念撮影するなど、例年になく盛り上がりを見せた。

(原子炉実験所)

国際交流会館おうばく分館で消防訓練と交通安全講話を実施

国際交流サービスオフィスでは、秋季全国火災予防運動の一環として、11月10日(土)に国際交流会館おうばく分館において、消防訓練および交通安全講話を実施し、40人近い会館居住者の参加があった。

交通安全講話においては、宇治警察署員による日本の交通ルール、特に自転車の乗り方を中心とした交通安全に関する解説があった。また、ひたたくりや夜道での安全対策についての注意喚起があった。

消防訓練においては、宇治市東消防署員による防火に関する講習、「地震・災害対策ビデオ」の上映、消火器・消火栓の取り扱い方講習が行われた後、署員指導の下で消火器及び自家用消火設備を使用する放水・消火訓練を行った。

これらの説明に当たっては、英語への通訳をかってでる者や積極的に質問する者など、自らの安全を守るために、居住者達は熱心に行事に参加し、日本



宇治市東消防署員の指導のもと放水訓練を行う会館居住者

での生活を安全・快適に過ごすための有益な機会となった。

(国際部)

ジェーン・グドール講演会を開催

霊長類研究所では、11月11日(日)に時計台記念館において、高円宮妃久子殿下のご臨席を賜り、霊長類研究所およびジェーン・グドール・インスティテュート・日本主催によるジェーン・グドール講演会「地球社会の調和ある共存に向けて－野生動物研究センターへの展望－」を開催した。

同講演会は、グドール博士への京都大学名誉博士称号贈呈のほか、本年度発足したチンパンジー・サンクチュアリ宇土ならびに霊長類研究所・福祉長寿研究部門の門出を祝うとともに、来年度発足予定の「野生動物研究センター」の設立を展望するものである。

第1部は、松沢哲郎霊長類研究所長の「『ひと科4属の共生』と動物園の役割」と題した講演の後、チンパンジー、ゴリラ、ヒトについてそれぞれ伊谷原一林原類人猿研究センター所長、山極壽一理学研究科教授、松林公蔵東南アジア研究所教授が講演するという趣向で、最後に日高敏隆名誉教授が絶妙なコメントでまとめた。

第2部のグドール博士の講演は、チンパンジーの挨拶(パントフット)から始まり、博士の貴重な体験談が大いに語られたほか、通訳に立った松沢所長との息の合ったやり取りが、つめかけた300人の参加者を魅了した。



講演するグドール博士(右)と通訳をした松沢所長

(霊長類研究所)

訃報

このたび、^{ごとうとしゆき}後藤俊幸医学研究科准教授、^{こほりたくじ}小堀鐸二名誉教授、^{たかまつたけいちろう}高松武一郎名誉教授、^{いぬい ともゆき}乾智行名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

後藤 俊幸 医学研究科准教授



後藤俊幸先生は、4月16日逝去された。享年59。

先生は、昭和45年京都大学農学部林産工学科を卒業後、同大学大学院農学研究科にて微生物学、ウイルス学を学ばれ、同51年博士後期課程を修了。平成元年には大阪医科大学博士(医学)を授与された。カナダ・モントリオール大学化学科に留学の後、大阪医科大学助手、講師、本学医療技術短期大学部助教授を経て、平成16年医学部助教授(現准教授)に就任された。

先生はウイルス学、微生物学において電子顕微鏡を手法として用いる分野、特にヒト免疫不全ウイル

スの構造と感染過程の電子顕微鏡的研究領域において数多くの研究をされ、平成8年日本電子顕微鏡学会論文賞を受賞されるなど、この分野の発展に貢献された。また、日本電子顕微鏡学会理事、同関西支部長を歴任されるなど、学会活動にも献身されるとともに、臨床病理技術士資格認定試験委員や日本電子顕微鏡学会技術認定委員を務められ、後進の指導にもあたられた。

先生はまた、本学を中心に多くの研究者の協力を得て病原細菌データベースを構築し、研究により蓄積された学術情報の統合と保全にあたるとともに、インターネットを通じて一般に公開することにより、その有効活用にも尽力された。

(大学院医学研究科)

小堀 鐸二 名誉教授



小堀鐸二先生は、9月5日逝去された。享年86。

先生は、昭和20年早稲田大学理工学部建築学科を卒業、同大学大学院特別研究生前期を修了。京都大学工

学部講師、同助教授を経て、昭和37年同大学防災研究所教授に就任、地盤震害部門を担当され、その後、昭和41年工学部教授に配置換、建築学第二学科建築基礎工学講座を担当された。昭和59年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、日本学術会議会員(第12期)、日本建築学会会長などを歴任された。退官後は、鹿島建設(株)代表取締役副社長、株式会社小堀鐸二研究所代表取締役として耐震・地震工学の実際の応用に尽力され、また国際地震工学会理事、国際構造制御学会会長を歴任するなど国内外の学会の発展に寄与された。

先生は、耐震工学、地震工学の広い分野にわたって先駆的業績を挙げ、地震工学分野の指導的役割を果たし、優れた研究成果と多彩な業績を挙げられ、広く学術および技術の進歩に寄与された。なかでも動力学的な観点から研究主題とされてきた建築基礎地盤の動特性ならびに建築構造物の耐震性の研究における貢献は特筆され、非線形振動論、弾性波動論、確率論を基礎とする構造物の耐震設計理論は国内外の学界から高く評価された。特に制震構造においては、制震システムの基礎理論の提唱のみならず、アクティブ制震を世界で初めて建築物に適用し、制震構造の発展に大いに貢献された。このように学術・技術の発展の他に、建築行政、都市防災など行政に関わる面においても新たな施策の展開に指導的役割を果たすなど多大の貢献をされた。

(大学院工学研究科)

高松 武一郎 名誉教授



高松武一郎先生は、10月6日逝去された。享年82。

先生は、昭和22年京都帝国大学工学部化学機械学科を卒業され、同大学大学院特別研究生、工学部講師、工学研究

所助教授を経て、同34年工学研究所教授に就任された。その後、昭和36年に工学部教授に配置換、衛生工学科衛生設備学講座、化学工学科装置工学講座、同装置制御工学講座を担当された。この間、昭和61年4月から2年間、工学部附属重質炭素資源転換工学実験施設長として、また同61年11月から同63年3月まで京都大学評議員として、学内行政に尽力された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉

教授の称号を受けられた。本学退官後は、平成7年まで関西大学工学部教授として、化学工学に関する教育、研究に従事された。

先生は、従来解析が中心であった化学工学研究に、プロセスの合成や対象の動的な扱いに関する方法論の構築を目的とした新たな学問体系である「プロセスシステム工学」の必要性を提示され、この研究分野の創始者として一貫してその教育、研究に尽力し、多くの人材を輩出された。また、学外においては、化学工学協会(現化学工学会)会長、日本自動制御協会(現システム制御情報学会)会長などの要職を歴任された。これら一連の教育研究活動、学会活動により、平成16年11月瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)

乾 智行 名誉教授



乾 智行先生は、10月7日逝去された。享年72。

先生は、昭和32年京都大学工学部燃料化学科を卒業、引き続き同大学院で学ばれた後、同37年京都大学工学部助手、同助教授を経て同58年教授に昇任、石油化学科触媒工学講座を担当され、平成5年改組により物質エネルギー化学専攻触媒科学講座触媒設計工学分野を担当された。平成10年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、先生は高速触媒反応に必要な要件や、複合触媒の作動機構の解明を進められ、また、多くの新規複合触媒を開発された。さらに、迅速結晶化法

を開発され、この方法により、メタロシリケートと総称される一群のマイクロ多孔性結晶触媒を創製された。これらの業績により日本化学会賞、触媒学会賞など多くの学会賞を受賞し、平成11年には紫綬褒章を受章された。

本学退官後はエア・ウォーター(株)に最高顧問として勤務、大学時代からの研究を継続、熱中和改質法を開発されて新規水素製造プロセスを完成された。さらに、平成15年9月から同18年6月まで、サウジアラビア国立キング・ファハド石油鉱物資源大学サウジ・アラムコ冠講座教授として現地に赴任され、技術者養成に尽力されるとともに、日本とサウジアラビアの友好に寄与された。

(大学院工学研究科)

日誌 2007.10.1 ~ 10.31

10月1日 役員会	20日 船井哲良記念講堂・船井交流センター竣工記念式典
6日 ドイツ, Annette Schavan ドイツ連邦共和国教育研究大臣 他13名, 総長他と懇談	22日 役員会
9日 役員会	23日 教育研究評議会
〃 部局長会議	24日 企画委員会
10日 F D研究検討委員会	25日 財務委員会
〃 企画委員会	〃 総長ランチミーティング
15日 役員会	〃 経営協議会
17日 国際交流委員会	29日 役員会

お知らせ

再生医科学研究所平成19年度学術講演会

- 日時：平成19年12月26日(水)10:20~17:00
- 会場：芝蘭会館稲盛ホール(京都市左京区吉田近衛町京都大学医学部構内北側 TEL:075-753-9336)
- 演題と講師：開会の挨拶 研究所長・生体機能調節学分野・教授 坂口 志文
第1部 10:30-12:00 座長：鍋島陽一(京都大学大学院医学研究科・教授)
「小胞体におけるタンパク質品質管理機構」 細胞機能調節学分野・教授 永田 和宏
「組織形態の精密な調節を担う分子について」
組織分化制御学研究部門・(寄附研究部門)・特任准教授 平井 洋平
「1分子追跡で見る細胞膜上のシグナル変換機構」
ナノバイオプロセス研究領域・教授 楠見 明弘

第2部 13:15-14:45 座長：伊藤紳三郎(京都大学大学院工学研究科・教授)

「再生医療のためのバイオマテリアル技術」 生体材料学分野・教授 田畑 泰彦
「骨・軟骨再生医療における臨床応用」

東京大学大学院医学系研究科・医学部 外科学専攻

感覚・運動機能医学講座 口腔外科学・教授 高戸 毅

第3部 15:00-17:00 座長：中畑龍俊(京都大学大学院医学研究科・教授)

「造血幹細胞を守る冬眠の機構とニッチシグナル」

東京大学医科学研究所 ヒト疾患モデル研究センター

高次機能(幹細胞治療)研究分野・教授 中内 啓光

「ゲノム再プログラム化と細胞融合幹細胞」 幹細胞加工研究領域・准教授 多田 高

「ES細胞移植によるパーキンソン病治療法の開発」 生体修復応用分野・准教授 高橋 淳
閉会の挨拶 生体材料学分野・教授 田畑 泰彦

4. 参加費： 無料(申込不要)

5. 問い合わせ先：京都大学再生医科学研究所学術講演会事務局

TEL：075-751-3802 FAX：075-751-4646 E-mail：soumu@frontier.kyoto-u.ac.jp

URL：http://www.frontier.kyoto-u.ac.jp

第11回リカレント教育講座「『心の教育』を考える－発達障害と家族への支援－」

臨床教育実践研究センターでは、毎年1回、学校教育現場等で子どもに関わる専門家を対象として、「心の教育」を考えるリカレント教育講座を開催しています。

第11回となる今年度は、「発達障害と家族への支援」を全体テーマとして開催します。1日目は、発達障害、不登校、いじめなど子どもたちが抱える問題について、また家族など周りの大人への支援について、事例検討を通して考えます。第2日目には、「発達障害と家族への支援」をテーマにシンポジウムを行います。(講座日程、講師などは、募集要項参照 <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/event/index.html>)

参加者の皆様とともに、広い視野から子どもたちの心や教育についてじっくりと考える機会にしたいと願っております。

1. 日 時：平成20年2月15日(金)13:00~17:00 ・ 16日(土)9:30~12:15

2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館

3. 定 員：100名(先着順)

4. 受講資格：学校教育関係者および心理臨床専門家(事例に関する守秘義務を守れる方)。詳しくは、募集要項参照。

5. 受講料：6,200円(消費税を含む)

6. 申込方法：郵送のみ。申込書に必要事項を記入し、官製ハガキ(住所・氏名を明記)を添えて、下記までお申し込み下さい。申込書記入の方法など、詳しくは、募集要項を参照してください。

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科総務掛「リカレント教育講座」係宛

7. 申込締切：平成19年12月末日

8. 問い合わせ先：京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター

TEL：075-753-3052 FAX：075-753-3018

URL：http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/event/index.html

隔地施設 紹介



フィールド科学教育研究センター 和歌山研究林 (<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/waka>)

フィールド科学教育研究センター 森林ステーション 和歌山研究林は、和歌山県の北東部、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された高野山の南西、和歌山県出身の作家、有吉佐和子の小説にも描かれた有田川の支流である湯川川の最上流部に位置します。



和歌山研究林全景

その歴史は、大正15(1926)年1月に、和歌山県有田郡八幡村の海瀬定一氏所有の山林564.5haに、99年の地上権が設定されたことに始まります。その後、事務所用地0.15haの購入、隣接地289.5haの地上権が追加設定され、現在の面積は842haとなっています。

研究林内の標高差は約800mで、極めて急峻な地形となっており、断崖・崩壊地が多く、沢筋には滝が見られます。特に「下り滝」は落差が約50mあり、広葉樹に囲まれたその美しい景観を見ようと、1年を通じて多くの人々が訪れます。

しかしながら、研究林を取り巻く交通事情は非常に厳しく、京都から研究林を訪れるには、公共交通機関を利用する場合、京都駅からJRで最寄りの紀勢本線藤並駅まで約2時間、そこから有田鉄道バスで清水営業所まで約1時間半、さらにタクシーに乗り換え約30分、合計4時間を要します。また、自動車を利用する場合は、名神・近畿・阪和・海南湯浅の各有料道路を通行して、約200km、3時間半の道のりであり、その上、事務所の直前約4kmは未舗装の林道を走行しなければならず、研究林へお越し頂くにはそれなりの覚悟が必要です。

更に、研究林には宿泊施設がないため、調査・研究などで長期滞在する場合は、事務所から約16km離れた旧清水町内の民間宿泊施設を利用しなければなりません。

研究林全域が水源涵養保安林・鳥獣保護区に、一部が高野龍神国定公園に指定されています。林内にはカモシカ、ニホンジカ、イノシシ、ノウサギ、タヌキ、テンなどが生息しています。カモシカ、ニホンジカ、ノウサギは幼齢造林木の枝葉の摂食、幹の切断、樹皮の剥離などの被害を起こしており、紀伊半島では数少なくなったツキノワグマも、数年に一度その痕跡が見られます。

本研究林の年平均気温は12.3℃、年降水量は2,647mmで積雪は少なく、森林植生は暖温带林上部から冷温带林下部の間に相当し、標高700m付近までは暖温带林の構成種である常緑広葉樹のアカガシ、ウラジロガシ、ソヨゴなどが優占する植生であり、その上部で本研究林の面積の大半を占める標高約700~1,000mの部分は中間温带林にあたり、常緑針葉樹であるモミとツガが優占していますが、その中に落葉広葉樹(ヒメシャラ、シデ類)や常緑広葉樹が部分的に生育しています。

さらに標高約1,000m以上の稜線に近い標高域は、冷温带林の代表種であるブナをはじめとする、ミズナラ、ミズメ、カエデ類といった落葉広葉樹から構成される植生となっています。

このように標高の違いに応じて多様な林相がみられることを利用し、尾根を歩いて下りながら、ブナ林、モミ・ツガ林と続く森林の垂直分布や、倒木などによる天然更新の様子、天然生林とスギ・ヒノキの人工林との違いを体験する森林見学のモデルコースを設定し、見学者に紹介されています。

研究林設置以前にはマッチの軸や板材などの生産を目的として針葉樹、広葉樹ともに盛んに伐り出されていたらしく、昭和3年の演習林概要によると針葉樹、広葉樹ともに直径10cm程度のものが大半で、設置当時の林相はかなり貧弱であったと思われます。

その後、スギ、ヒノキの人工造林が積極的に進められた結果、現在では人工林率が50%を超えて、フィール



和歌山研究林の位置



ド科学教育研究センターの研究林では人工林率が最も高く、こうしたことから、人工林の育成・施業に関する教育・研究が盛んに行われています。

職員構成

教員 2 人, 技術職員 6 人,
技能補佐員 1 人



ウッズサイエンスの様子

林業のさかんな紀伊半島にあって、地上権設定当初から手を加えずに維持

されてきた八幡谷学術参考林は、和歌山県内でも貴重な天然生モミ・ツガ林として、古くからその生産力・動態・土壌動物相・昆虫相などの研究が数多くなされており、現在も、フィールド科学教育研究センターによるプロジェクト研究の対象地として、森林の動態と多様性維持機構の解明、森林生物種の生活史と相互作用の解明、森林生態系の物質循環からみた環境保全機能の解明などを目指して、調査・研究が行われています。

和歌山研究林では、地域開放特別事業として、さまざまな事業を行っています。和歌山県立有田中央高等学校清水分校と共催し、1年生を対象とした「SHIMIZU タイム」(総合的な学習)では研究林に存在する多様な森林について学習しています。また、2002年度より3年生を対象に、林業に関する科目「ウッズサイエンス」を開講しています。「ウッズサイエンス」では研究林内で週1回2時間の授業を行い、地域の主要な産業である林業について学習し、森林内での実習を通して自然の素晴らしさに触れ、「緑を守ることの大切さ」を身につけ、また、身の周りの自然環境について自ら考えまとめる力の習得を目指しています。授業の主な内容は、「森の仕組みと働き」、「木材利用の現状と日本林業」などの講義と、コンパスを使った測量、樹木識別、チェーンソーなどの林業機械を使った間伐作業などの実習です。



森林体験学習

有田川町立八幡小学校とは、森林体験学習を実施しており、2007年度は小学5年生24名を対象に、春は植樹体験、秋は間伐体験を行いました。



和歌山研究林に建つ j.Pod

去年は、有田川町教育委員会との共催で小中学生を対象とした山観察会を開催し、有田川河口近くの有田市立田鶴小学校の生徒たちは、身近な川がどこからどの様に流れてくるのかを、自分たちの目で直接見て体験する学習などを行いました。

2005年春には、京都大学と企業の共同開発による「森林資源の循環的有効利用」を目的とした新しい木造建築システム(j.Pod)による教育研究棟が完成し、学生実習や地域開放事業の講義室として、また、採取してきた渓流水や土壌などを分析する実験室として利用しています。

和歌山研究林の間伐材を利用した j.Pod は、京都大学の北部構内と本部構内にも各1棟が建てられています。2006年8月に本部構内に完成した j.Pod は、国際交流セミナーハウスとして海外からの学生に活用されています。今後も和歌山研究林の間伐材を用いた j.Pod の建築が予定されており、間伐材を大量に有効利用するモデルとして、これまで放置され続けてきた日本の人工林を生産性の高い森林へ変え、低迷する林業を活性化させることが期待されています。

〒643-0551

和歌山県有田郡有田川町上湯川76

電話：0737(25)1183

FAX：0737(25)0172

E-mail：waka@kais.kyoto-u.ac.jp

http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/waka

アクセス

- ・京都駅からJR紀勢本線藤並駅下車、有田鉄道バスで清水営業所下車後タクシーを利用、合計約4時間。
- ・名神・近畿・阪和・海南湯浅の各有料道路を通行して、約200km、3時間半。